

二〇一五年度
入学試験

国語

一回(二月一日)

富士見中学校

注意事項

- (1) 問題は1ページから19ページまであります。
- (2) 問題にページ不足や印刷の良くないところがあれば、すぐに手をあげて、かんとく監督の先生に伝えてください。
- (3) 解答はすべて解答用紙の定められた場所に、指示通りに記入してください。
- (4) 句読点等は字数に数えて解答してください。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(作問の都合上、本文の小見出しは省略してあります。)

コミュニケーション力を見極める際に基本となるのは、お互いの会話を絡ませることができているかどうか、という点である。一人で話している間はまともな話をするのできる人の中にも、相手の発言と自分の発言とを絡めて話すことのできない人はイガイに多い。こちらの話をまったく聞いていないかのような話の持つて行き方をする人がいる。①そのような人の特徴としては、次のようなポイントが挙げられる。

一つ目は、質問をあまりしない。相手のことに、あまり関心がないのだ。たとえ質問をしたとしても、それは見せかけだけで、すぐに自分の話をし始める。

二つ目は、人の話を途中で遮る。自分の話は延々と時間をとってするくせに、人が話し始めると途中で遮ってしまう。これは、ボールゲームで言うと、ボール・ポゼッション(ホユウ)の意識が低いということだ。自分がどれだけボール(話す時間)を持っているかを意識していないと、チームメイト(話し相手)にボールをまわさなくなる。子ども同士の遊びでも、球を友達にまわさずに、一人でホユウしている子どもがいたら周りから注意されるだろう。話をしているということは、ちょうどAのと同じ状態だ。ボールゲームは皆で楽しむものだ。会話も球をB的にまわさなくてはゲームにならない。

説教のモードにすぐに入りがちな人は、相手の話を最後まで聞ききる習慣が少ない。すべてを説明しきる前に、初めの言葉で怒りだしてしまう。ちょっとした言葉づかいが逆鱗に触れ、話のホンスジに入る前に説教が始まってしまう。これではコミュニケーションがとれていないと言える。

三つ目は、人が使った言葉を上手く使いこなすことがないということだ。会話をしていると、それぞれが使うボキャブラリーというものがある。相手が慣れ親しんでいる言葉をこちらがその場で上手に使いこなすことができると、コミュニケーションはカクタンに深まるのだが、これを意識して行っている人は少ない。反対に、自分の使うボキャブラリーが上手に相手の話すCに組み込まれると、会話が絡み合っているなど感じるものである。

会話の素材は、言葉だ。お互いのボキャブラリーが混ざり合うことで、味わいのある料理ができあがる。肉じゃがをつくるのに、肉とじゃがいもをそれぞれ別に料理し別の器により分けているようならば、それは肉じゃがとは呼ばない。会話でも、素材(ボキャブラリー)が混ぜ合わされ、一つの文脈に溶け合わされるからこそ、会話と呼べるのだ。

相手の話をきちんと聞く習慣がなく、自分の得意ネタを話し続ける人を、私は「人間ジュークボックス」と呼んでいる。ジュークボックスというのは、かつてお酒を飲むバーのようなどころにあったミュージック・マシンだ。コインを入れK-3とか、F-2といった記号を押すと、その記号にセットされている音楽が鳴り出す。あらかじめセットされている曲しか流れない。自分の話ばかりしたがる人の中には、自分の中にあらかじめセットされている話を反復する傾向があるのだ。

相手が変わっても同じエピソードを繰り返し話す人がいる。そうした人にとって会話の相手は、「話のジュークボックス」の記号ボタンを押す役割のためだけに存在する。

ジュークボックス化は、一つひとつの話がつまらないということとは関係がない。文脈にソっていない、相手

の話したいことと絡んでいない、ということが問題なのである。

私は個人的に、ある人がほけているかどうかの判断基準として、相手と話を絡ませて会話を続けることができるかどうかという点をチェックポイントにしている。高齢になっても、相手の話にきちんと反応し、それに絡む形で自分の話を上手に織り込んでくる人は、ほけてはいないと判断する。若い人でも、話が絡まない場合には、「若いのにほけているなあ」と感じる。若い人の場合には自己中心だと判断するのが普通かもしれないが、あえて「すでにほけている」と認定してしまった方が現実には即しているように私には感じられる。相手の言葉を刺激として受け取り、自分の脳の反応を相手にお返しとして返す。これが、脳が働いている人の対話の仕方だ。それができずに自分の世界に閉じこもっている場合は、脳が固まってきていると思うのだ。

文脈と全く関係のない話題を平気でいきなり持ち出してきたり、もう既にスんだ話を蒸し返してきたりすると、これもまた頭がぼけていると言いたくなる。文脈をしつかり押さえた話し方をする人は、頭の老化が遅い。

④相手に柔軟に対応し、文脈を共につくることができるとは、年齢にかかわらず老いてはいない。

コミュニケーション力をはかる基準としては、話す相手が幅広いという基準も挙げることができる。誰か特定の人間としか話せないとなると、コミュニケーション力は低い。お母さんとか話すことのできない子ども、友達としか話せない若者、同年代・同性の仕事仲間としか話せない会社員など、会話の相手の幅が狭い人はコミュニケーション力が十分ではない。老若男女と接する機会が多いほど、柔軟なコミュニケーション力が養成される。幼児とはどんな話をしたらいいのか、二十代の女性とは……といったように相手によって話題を変えて、会話の糸口を見つけ出し出すことができれば、コミュニケーション力は相当高い。

もちろん年齢や性別だけでは十分ではない。相手の置かれている **1** 的な状況や関心事を瞬時にサツチして、対話関係を結ぶ。 **2** 的な状況としては、マンションのエレベーターで二人きりになった場面を考

えてみよう。五歳児と一緒にになったときに、「何階まで行くの?」と聞く程度のことには普通だ。まったく一言も交わさずに過ごすとするれば、コミュニケーションを煩わしく思っていると判断している。「どこの幼稚園に行っているの?」や「今日「ちびまる子ちゃん」やるよね、見る?」といった話題をふってみることができるかどうか。本当に上手くやれば、十秒ほどの間でも多少とも心の通い合う会話を交わすことはできる。

世間話の **h** コウヨウというものがある。お天気の話から入り、とりとめもない世間話をする。そうすることで、お互いに素知らぬふりをしているよりは、ずっと気持ちが悪くなる。一緒に空間にいて、相手がそこにいることは分かっているのに、あたかも誰もいないかのように振る舞い合う——そうした気まずい空気を過ごすよりは、さっと世間話をして、気持ちを交わし合っつて別れる。その方がずっと気分がいい。

誰とでもすぐに世間話ができる。これは重要なコミュニケーション力である。

世間話が無気ない話題でお互いの交流を図るものとすれば、それと **3** 的なのが、いきなり本題から入るといふやり方である。これも世間話と同じく、コミュニケーションの一つの技だ。本題にすつと入ることで、お互いに時間が無駄にならない。忙しい相手の場合は、このやり方が喜ばれる。相手の関心はその用件にのみあり、人格的な交流などはさして望んでいない場合もある。そうした状況では、本題から入り、用件をさっさとすませるのがお互いにとっての幸福だ。

だが、いきなり本題に入るといふ技は、身に付いていない人がやると、単にぶしつけになってしまう。日本で

は 4 的に本題に入る前に挨拶が長々と行われた。それが相手に対する礼儀れいぎという意味合いもあった。しかし、外堀そとほりを埋めるようにして徐々に本丸に近づいていくようなやり方は、現代のコミュニケーションには合わない場合も多い。会議などでも本題の審議しんぎに入る前の報告事項じこうが長すぎて集中力が損そとなわれるケースがよくある。いきなり本題に入る技が組織（システム）として欠如けつじょしているのである。

事柄ことばらの重要度・優先順位にしたがって話の順序を決めていく、というやり方は 5 的だ。だんだん重要な問題に移っていくのではなく、もっとも重要な問題から話を始める。途中でシヨウガイいが起こって話が途切れても、もっとも重要なことだけは話し終えている、というやり方である。この「事柄の優先順位にしたがった話し方」を技として意識的に身につけると、ビジネス・コミュニケーションの武器となる。世間話の技とこの技を、状況に応じて使い分けることができれば、ハイレベルなコミュニケーション力と言えよう。

このようにコミュニケーションのさまざまな要素を技として捉え直す観点には、違和感いわを持つ人もいるかもしれない。コミュニケーションとはもっとも自然なものだ、という観点からの疑問だ。だが、現代においては、コミュニケーションはカクダンにスピードアップされている。的確とくに要旨ようしをつかみ、自分の言いたいことを伝えねばならない。そのテンポは加速している。仕事の状況では、なおさらキビしく的確なコミュニケーション力が求められる。つまり、要求されているコミュニケーション力の水準が高くなってきているのである。それに対応するには、コミュニケーションを一度、技として捉え直す観点が必要なのである。

（齋藤孝『コミュニケーション力』より）

問1 ——— ①「そのような人」とは、どのような人ですか。本文中から三十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問2 ——— ②「これ」の指示する内容を本文中から二十字以内でぬき出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問3 A に入る文として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手からのパスを遮っている
- イ 相手にボールをぶつけている
- ウ ボールを投げている
- エ ボールを持っている
- オ ボールの方向を見守っている

問4 B ・ C に入る本文中の語句をそれぞれ答えなさい。

問5 ——— ③「人間ジュークボックス」と筆者が呼ぶ理由を、本文中の語句を用いて四十字以上五十字以内で答えなさい。

問6 ——— ④「相手に柔軟に対応し、文脈を共につくり出すことができる」とは、どういうことですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手が慣れ親しんでいる言葉を上手に言い換えて自分の言葉にして、会話を続けること。
- イ 相手の年齢や性別に合わせてふさわしい言葉を選びながら、会話をはずませること。
- ウ 相手の話題にしっかりと反応して、そこに自分の話を織りこんで会話を続けること。
- エ 相手が誰であっても、その相手にふさわしい話題を選びながら、会話を盛り上げること。
- オ 相手の話を最後までしっかりと聞いて、疑問点は質問しながら会話を続けること。

問7 ——— ⑤「外堀を埋めるようにして徐々に本丸に近づいていくようなやり方」とは、どういうことですか。

最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 相手の弱点を指摘しながら会話し、最終的に相手に反論するすきを与えないようにすること。
- イ 実際の例やたとえ話を多用しながら会話し、相手に話の本質をわかりやすく表現するように努めること。
- ウ 相手の話題をしっかりと受け入れて、その言葉を用いながら最終的に自分の本音を相手に伝えること。
- エ 最初は共通の話題などで会話を盛り上げながら、次第に相手と本心を打ち明け合うようになること。
- オ 挨拶や報告事項などのような優先順位の低い話題から会話に入り、次第に本題へ移っていくこと。

問8 ——— ①「とりとめもない」・②「ぶしつけ」の意味として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、

記号で答えなさい。

- | | |
|--|--|
| 1 | 2 |
| <ul style="list-style-type: none"> ア 味わいも深みもないこと イ 細かなことにこだわらないこと ウ 平凡<small>へいほん</small>でおもしろみのないこと エ はっきりした目的のないこと オ 休む間もなく続くこと | <ul style="list-style-type: none"> ア 礼儀<small>れいぎ</small>をわきまえないさま イ ぶかつこうなさま ウ 道理に合わないさま エ 役に立たないさま オ 思いどおりにならないさま |

問9 ——— ① ⑤ に入る語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

(同じ記号を複数回使用することはできません。)

- | | | | | |
|--------------------------|------|------|------|-------------------------|
| ア 対照 | イ 社会 | ウ 絶対 | エ 具体 | オ 比較 <small>ひかく</small> |
| カ 封建 <small>ほうけん</small> | キ 伝統 | ク 合理 | ケ 積極 | コ 科学 |

問10 ——— a j のカタカナを漢字に直しなさい。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

翌日も、伊藤卓也は休みだった。その伊藤卓也と、わたしは思いがけないところで会った。病院のエレベーターのなかだった。

閉まりかけたエレベーターに飛び込むように乗ると、伊藤卓也がわたしの目の前に立っていたのだ。

※「なしてこげんところにおると？」

思わずそう聞いてしまった。

学校だったら、けっして声などかけなかったはずだ。A びっくりして、思わず聞いてしまった、そんな感じ。じぶんがしたことをそんなふうにするのは変だけど。

①「きみ、同じクラスの……」

伊藤卓也はわたしの名前を言おうとして、言えなかった。名前を知らないのだ。

「黒田です。心配しとったとよ」

わたし、なに話してるんだらう。居合わせたこの状況にもすごく驚いたけれど、それ以上に、話しかけているじぶんにもっと驚く。

②「心配？」

※怪訝そうに伊藤卓也が聞き返す。

「あ、あの、おうちの事情だって、先生、言いなさってたから」

「ああ、ちょっと祖父が」

「そうなん。わたしとこは、ばあちゃんが入院してるの、ここに」

聞かれもしないのにわたしはそう言い、でもそれ以上のことは話すことがなかった。わたしは黙って、エレベーターの数字を見た。ほかに見るようなものがなかったから。10と11が赤く表示されている。ばあちゃんが入院しているのが十階だから、伊藤卓也のおじいさんは十一階。

十一階は特別室だけがある階だ。一泊五万もするらしいと、ずいぶん元気になったばあちゃんが、かあさんに話しているのを、何日前に聞いたばかりだった。※すごかですねえ。どげんひとがはいりなさるんでしょうねえ。ばあちゃんとかあさんはそんなふうに言い合っていたっけ。

エレベーターが止まって、ドアが静かに開く。

「それじゃ」

と言って降りた。

だけど、それだけじゃ足りない気持ちがある。B 湧き上がって、振り向いて、閉まりかけたドアの向こうに立っている伊藤卓也を見ながら急いで言った。

「お大事に。伊藤くんもね」

③伊藤卓也が「うん」と言うようにうなずいたのが、閉まっていくドアの隙間から見えた。どきどきする心臓を抱えて、ばあちゃんの病室に向かおうとしたそのとき、

「えーと。えーと、黒田さん」

後ろから呼び止められて振り向くと、伊藤卓也が立っていた。

伊藤卓也も、エレベーターのなかで話しかけたわたしと同じくらい、じぶんの振る舞いに驚いているように見えた。

伊藤卓也とわたしが違うのは、わたしは逃げるようにその場から去ってしまったのに、伊藤卓也が立ち続けていたことだ。気持ちいいぐらい真っ直ぐに伊藤卓也は立っていた。伊藤卓也は、いつもそんなふう立つ。

「よかったら」

それだけ言うと、伊藤卓也は黙ってしまった。シセイだけは変わらないまま、驚きの表情が、戸惑いのそれに変わっている。

「よかったら、話をしたいんだけど。時間はある？」

わたしはうなずいた。言葉は出てこなかった。その代わりに、だれの耳にも聞こえないかと思うくらい大きく心臓が音をたてた。

「父方の祖父なんだ」

屋上のベンチに伊藤卓也と並んで座って、わたしは伊藤卓也がそう話したのを聞いた。

夏の夕方の屋上には、昼の暑さとまだ取り込まれていない洗濯物が少し、今日という一日の名残みたいに、忘れ物みたいに、残っていた。藍色の浴衣が一枚と何枚かの白いタオル。ときどき風が吹いて、そのときだけ、洗濯物は揺れた。

④ 「あまりいい状態じゃないんだ」

「そう」

「祖父はこっちでひとりで暮らしてたんだ。祖母がおとし亡くなって」

「うん」

「具合がよくないと知らされて、母が祖父の面倒を見るためにこっちに来ることになった。父は仕事、ぼくは学校があるから、母ひとりで行けってさ。長くなるだろうからって」

「でも、伊藤くんも来た」

「勉強なんてどこでだってできるんだ。なのにあのひとは、母にだけ祖父を押し付けようとする。でも、ぼくが来たのはそれだけじゃない」

おかあさんひとりに押し付けたくなくて、それで、伊藤くんもこっちに来たど？

と、こころのなかで質問する。

伊藤卓也はその質問に答えるように、

「おじいちゃんが好きだったんだ」

と、言った。

「そうね」

「小さいころからずっと。大きくなって強くてやさしくて。学校の先生をしていたせいか、物知りで、ぼくがなにを聞いても、なんでも答えてくれた。忙しがってばかりいた父とは大違いだった」

「伊藤くん、小さいころは、こっちにおったと？」

「ぼくはずつと東京。こっちには **C** 来るだけだったけど。でも気が合った。おじいちゃんが父親だったらどんなにいいだろうってずっと思ってた。ひとり電話をかけられるようになると、**D** かけて、いろんなことを聞いた。星のこととか、宇宙のことかも」

「もしかして、おじいさんって、大学の先生？ **b** ハカセとか」

「うん。小学校の先生だった。でも、どうして？」

「うん。氣[※]いば、悪くせんと聞いてな。伊藤くん、さつき十一階を押してやったら。そこ、特別室の階じゃけん。こないだ、どんなひとがはいりなさるんじやろって、ばあちゃんと話しとったから」

「おじいちゃんは普通^{ふつう}の病室がいいって言ったんだ。それを父が特別室に押し込んだ。それで親孝行した気になってる」

「ヨケイなこと聞いてしまって、ごめん」

「いや、そんなことない。だれかに話したら、ちょっとはせいせいした」

伊藤卓也が、空を見あげたのがわかった。わたしも空を見あげる。明るさの残っている空、まだ星が輝^{かがや}いていない空に、伊藤卓也はなにを見ているのだろう。伊藤卓也がずっと空を見あげていたので、わたしもそうした。

西の空に、ひこうき雲ができていくのが見えた。ひとすじの雲が夕陽^{ゆうひ}を浴^あびて光る。

「 1 」

そう言いながらわたしは、バスの窓を一瞬^{しと}のうちによぎっていった、いつかの紙ひこうきを思い出した。

「 2 」

「 3 」

「 4 」

伊藤卓也が口にした紙ひこうきという言葉がわたしの心臓を **E** させた。わたしら、同じことを考える。血液がいきおいよく心臓から押し出されて、全身を駆け巡^{めぐ}る。

「さあ飛んでいけって言っは、おじいちゃんは何度も飛ばしてくれた」

紙ひこうきはどこに飛んでいくんだろう。

⑧ 「宇宙に行く」

「えっ？」

「宇宙に行くって言ったんだ。これから、宇宙に行くんだって。意識がなくなる直前。もう、長くはないんだ」
伊藤卓也の頬^{ほお}を涙^{なみだ}がつたう。その涙を、伊藤卓也はムゾウサにぬぐった。

(石井睦美「皿と紙ひこうき」より)

※ なしてこげんところおると?.....どうしてこんな所にいるの?!

※ 怪訝.....どういう事か不思議に思われ、納得がいかない様子。

※ すごかですなえ。どげんひとがはいりなさるんでしようねえ。

.....すごいですね。どんな人がお入りになるのでしょうか。

※ 気いば、悪くせんと聞いてな。……気を悪くしないで聞いてね。

問1 a～dのカタカナを漢字に直しなさい。

問2

A

E

 にあてはまる語句として最も適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 急に イ たまに ウ どくんと エ ゆったりと
オ あまりに カ わずかに キ しょんぼり ク しょっちゅう

15

問3 ①「伊藤卓也はわたしの名前を言おうとして、言えなかった」とありますが、それはなぜですか。

その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「わたし」と思いがけない所で会ったので、びっくりしてしまったから。
イ クラスにおける「わたし」の存在感が薄いため、名前を覚えていなかったから。
ウ 伊藤卓也は学校にまったく来ていないため、クラスメートの名前を知らなかったから。
エ 伊藤卓也は「わたし」と同じ学校に、はじめからずっといたわけではないから。
オ 伊藤卓也は友だちに関心がなく、クラスメートと話したりすることがなかったから。

問4 ②「『心配?』怪訝そうに伊藤卓也が聞き返す」とありますが、伊藤卓也はどうしてこの時「怪訝

そうに」聞き返したのですか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 学校を休んでいる自分を、「わたし」が心配してくれていたのが思いがけなかったから。
イ 自分の体調が悪いことを、「わたし」が心配してくれていたことに驚いたから。
ウ 「わたし」が何を心配していたと言っているのか、わからなかったから。
エ 祖父の具合が悪いことを、「わたし」が心配してくれていたのが思いがけなかったから。
オ 自分のことなどを心配してくれる人がいたことが信じられなかったから。

問5 ③「ときどきする心臓」とありますが、この時の「わたし」の状況として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 急いで「ばあちゃん」の病室に向かっていたので、息が苦しくなっている。
イ 「ばあちゃん」のことが気になり、早く様子を知りたいと気が焦っている。
ウ 逃げるようにその場から去ってしまった事が申し訳なく、後悔している。
エ 思いがけない所で伊藤さんと一緒になったため、まだ緊張がとけないでいる。
オ 伊藤さんに思わず言葉をかけて会話をしたことで、気持ちが高ぶっている。

16

問6 ———④「あまりいい状態じゃないんだ」とありますが、誰がどういう状態であるということですか。解答らんに合うようにそれぞれ本文中のことはをぬき出して答えなさい。

問7 ———⑤「ぼくが来たのはそれだけじゃない」とありますが、ぼくが来たもう一つの理由が書かれた一文を本文中からさがし、初めの八字を書きなさい。

問8 ———⑥「せいせい」と同じような意味のことはを、ひらがな四字で考えて答えなさい。

問9 ———⑦「伊藤卓也がずっと空を見あげていたので、わたしもそうした」とありますが、この時の「わたし」の気持ちを二十五字以内で答えなさい。

問10 ———⑧「宇宙に行く」とありますが、何が宇宙に行くと伊藤卓也は言っていますか。本文中からぬき出して答えなさい。

問11 「1」「4」に、次の中から一文ずつ入れて会話を完成させた場合、「2」「4」に入るものはどれですか。それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ひこうきでまわりの空気が乱されてできるんだ

イ 紙ひこうきって、知ってる？

ウ ひこうき雲や

エ へえ。よう知つとるんやね

オ おじいちゃんがひこうき雲のこともいろいろ教えてくれたんだ

カ それもおじいちゃんに教わった。そういえば、ぼくが小さかったころ、おじいちゃんは紙ひこうきを折ってくれたことがあった

問12 伊藤卓也はどんな少年と思われませんか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 正義感は強いが、強情で周りから孤立こ立りしてしまう少年。

イ 繊細せんさいな感性を持った、しんが強く思いやりのある少年。

ウ 自分以外の人々をすぐ非難する、自信家で冷たい少年。

エ 周囲の人に心配をかけないよう、無理してしまう少年。

オ 素直に自分の気持ちを話すことができる、明るい少年。

問13 伊藤卓也は父をどんな人と思っていますか。本文中から読み取って、四十字以内で答えなさい。

